

今回の論説文のテーマは「私が考える“未だない仕事に必要なチカラ”」でした。皆さんにとって就職は数年先の話なので、まだ「仕事」というものに実感がわいていない人も多いかと思いますが、将来の夢や「やりたいこと」をすでに胸に秘めている人は少なくないでしょう。ちょっと難しいテーマのようにも思えますが、「未だない仕事」を社会一般の未来の話と考えるか、その上で自分の問題としても考えるかによって、随分と書きやすくなり、読みやすくなったはずです。その点で、やや頭でっかちで、優等生的な、ゆえに単調な論調の作品が多いという印象でした。

寄せられた作品の多くで、符丁を合わせたかのように統一していたキーワードがありました。「A I（人工知能）」「ロボット」「コミュニケーション能力」の3つの合言葉です。一言で言えば、「高度なA Iを持ったロボットが活躍する時代になるが、人間と人間とのコミュニケーション能力だけは代われない。そこに新しい時代の仕事がある」というもの。入試によく出る評論文に英文学者でエッセイストの外山滋比古さんの「思考の整理学」という名著があり、その中で「コンピューター人間で終わらないこと」という主張があります。これは30年も前に書かれた文章ですが、人間が考えることはあまり変わっていないような気がしました。人類が迎える敵はかなり前からコンピューターだったのでしょね。そのことをどうわかりやすく、論理的に説明してゆくかが腕の見せ所となりました。

優秀賞に輝いた「A I時代を生き抜くために必要な力とは」はまず、「多くの仕事をA Iに任せようになっても、人間は働き続けるだろう」と仮定し、そこに「A Iに取って代われない仕事がある」と仮説を立てました。その代表例が「人間の感情に深く訴える仕事」で、具体例として俳優や歌手、芸術家、漫才師、交渉や説得をする仕事を挙げました。さらに自らの経験として道德の授業でやった「お笑い」の体験を紹介しました。みなさんにたくさん笑ってもらうためにいろいろと考え、サービス精神を発揮して頑張ったところ、大成功。「隣にいる人に元気になってほしい、というような気持ちが伴う仕事はA Iに取って代わられることはないだろう」「人として、周りの人をいたわり、人に語りかける能力こそが最も必要とされる力」と結論付けます。まず、ある論を仮定し、自分の体験などの具体的な例を挙げながらその仮定を証明し、結論に導いてゆく。このパターンだと読者が無理なく、筆者の主張を理解することができます。こうしたパターンを覚えておいてください。

佳作の「未来のニーズ」も「人工知能が発達するが、人間独自の能力、コミュニケーション能力が重要だ」という論の進行でした。最近、人気の高い職業として「ユーチューバー」を挙げ、そこにあるのはネットを通じた「コミュニケーション能力」だと言います。そして、これから進む高齢化社会の中では「遠隔介護」という分野でこの能力が発揮される、と仮定します。ビデオ通話などを通して遠隔で介護ができれば、ベッド不足なども解消する。そこには「高度なコミュニケーション能力が求められる」というものです。「ユー

チューバー」や「高齢者介護」といった、いかにも現代社会を反映した言葉を織り交ぜながら進めた点はよかったと思いますが、もう少し、自分の体験や具体的な遠隔介護の仕事の例がほしかった。仮定の話だけではなく、実例を挙げることで読者を納得させる技法は忘れないようにしてください。

論説文は堅苦しいイメージがありますが、難しい概念や用語を使えばいいというものはありません。文章はあくまでも読者に読んでもらうためのもの。読む人の立場になって、ある仮説を具体的な実例を挙げながらわかりやすく説明し、最後は自分の主張に納得してもらうように仕掛けるテクニックが必要です。どんな文章でも相手がワクワク、ドキドキ、面白い、いや違うぞという反対論でも構いません、とにかく何らかの感動を覚えながら読んでもらう「サービス精神」が必要です。これもまた、どの時代になっても消えることがない仕事には不可欠な力なのではないでしょうか。